

# 飛鳥寺南方遺跡

## 発掘調査報告

95. 3

奈良国立文化財研究所編

# 飛鳥寺南方遺跡

## 発掘調査報告

## 目 次

	頁
1 調査の経緯	1
2 検出した遺構	2
3 検出した遺物	5
4 石組暗渠 SX10内堆積土の微遺体分析	8
5 まとめ	9
6 石組溝および暗渠位置復原工事	10

## 挿図目次

- fig. 1 飛鳥寺南方遺跡周辺調査位置図（1／4000 奈良国立文化財研究所 昭和44年測図 1／2000地形図使用）
- fig. 2 飛鳥寺南方遺跡第1・2・3次調査遺構実測図（1／125）
- fig. 3 出土土器実測図
- fig. 4 出土土器・土製品実測図
- fig. 5 花粉・寄生虫卵組成図

## 図版

- PL. 1 (1) 第3次調査区 SX10・SD20 (北から)
- PL. 2 (1) 第3次調査区 SX21・SD22・SX23・SD24 (南から)  
(2) SX10・SD20復原工事竣工 (北から)  
(3) 第2次調査区 SX10・SX11 (北から)

## 例　言

1. 本書は、奈良県高市郡明日香村飛鳥小字戸ノ下において実施した飛鳥寺南方遺跡の発掘調査の報告である。
2. 調査は、奈良県が計画した広域下水道飛鳥川幹線管渠第27号発進立坑の掘削にともなう事前調査として、奈良県教育委員会の委嘱を受けた奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部（部長、牛川喜幸）が実施した。
3. 調査は、北区と南区にわけて行い、調査期間は、第1次調査（北区）が平成4年12月1日～12月14日、第2次調査（南区）が平成5年1月12日～2月4日、第3次調査（北区）が2月15日～3月10日である。調査総面積は約245m<sup>2</sup>となった。なお、推進工法による下水道工事の終了後に、石組溝と石組暗渠の復原工事を平成7年2月15日～3月7日まで実施した。
4. 調査には、大脇潔・本中真・岩永省三・村田和弘・伊藤敬太郎が参加し、遺構の解体と復原工事には、平城宮跡発掘調査部計測修景調査室の小野健吉の協力を得た。
5. 調査の実施にあたっては、住友建設・日本国土開発共同企業体明日香シールド作業所と、奈良県教育委員会・奈良県広域下水道課・明日香村下水道課の協力を得た。
6. 本書の作成は、部長牛川喜幸の指導のもとに、調査部員全員があたり、『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 23』に報告した内容に、その後の出土遺物の整理によって得られた成果と、工事終了後に実施した復原工事の経過を併せたものである。土器を中心とする遺物の整理は深澤芳樹と荒木浩司が担当した。なお、「石組暗渠SX10内堆積土の微遺体分析」は、天理大学附属天理参考館の金原正明氏と、環境文化研究所の金原正子氏に依頼した原稿を再録した。
7. 本書では検出した各遺構に遺構番号を付けた。その際、溝にSD、道路にSF、土坑にSK、その他をSXとして表記した。
8. 写真は井上直夫が担当した。
9. 本書の編集は大脇が担当した。

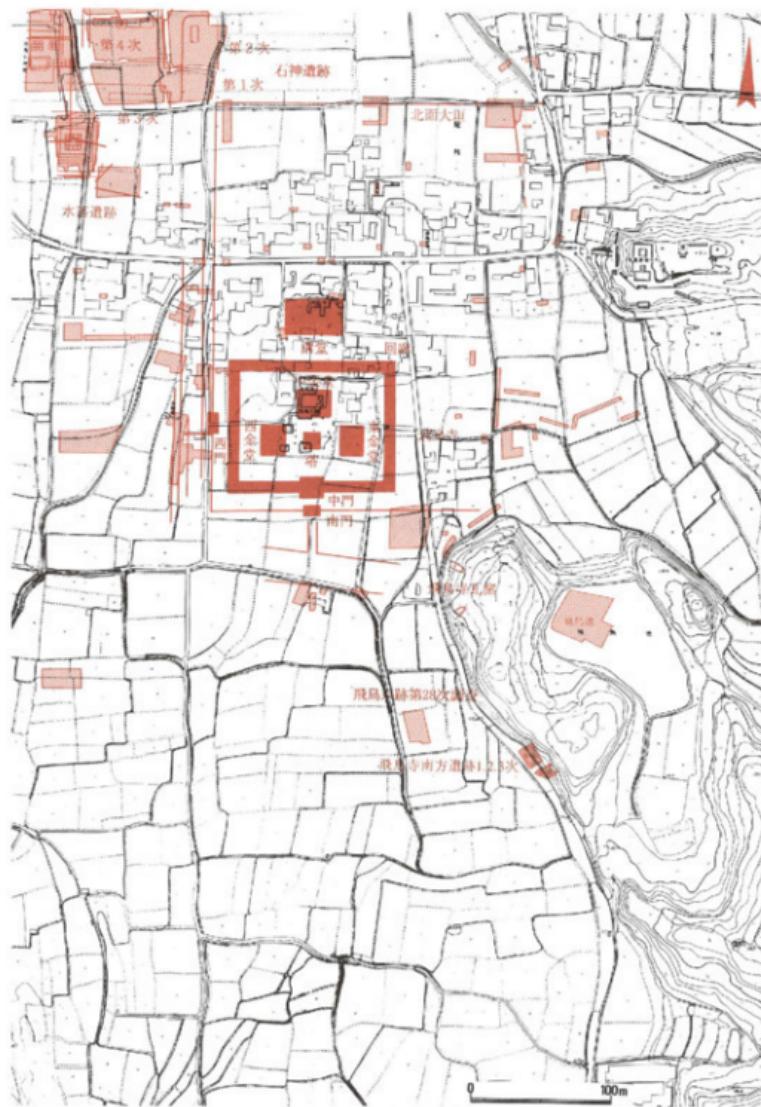


fig. 1 飛鳥寺南方遺跡周辺調査位置図 (1 / 4000)

## 1. 調査の経緯

明日香村内に計画された広域下水道の予定路線については、飛鳥・藤原地域の埋蔵文化財の破壊を最小限にとどめるため事前に協議を重ね、藤原京の条坊遺構や、史跡指定地に立坑を設けることはできる限り避ける方針がとられた。その結果、飛鳥川幹線管渠第27号発進立坑の位置は、飛鳥寺の史跡指定地外で飛鳥寺瓦窯から南に約150m離れた地点が選ばれ、遺構の有無を探るために南北10m、東西6mの範囲を調査することになった。

ところが、この第1次調査で7世紀末に遡る大規模な石組溝が発見されたため、関係諸機関と協議し、立坑の位置を南東へ移して遺構の保存を計るべく第2次調査を実施することになった。第2次調査は、第1次調査で検出した石組溝の南延長部と、工事に際して避けなければならない道路下のNTTの埋設管の位置を確認するために、東西13m、南北8mの不整形の調査区を設けて実施したが、この調査区でも石組溝の延長部と、新たに一時期古い石組暗渠を検出するに至った。

第27号立坑予定地は丘陵沿いに立地し、遺構密度も比較的低いのではないかとして選定されたのであるが、大規模な遺構が、しかも複雑に重複していることが確認されたのである。しかし、奈良交通バスの運行を確保できる迂回路と、工事基地に必要な最低限の面積を確保できる用地がここ以外には求められることもあるって、立坑の位置を移し、遺構を全面的に保存することはきわめて困難な状況となった。そこで、再度協議を重ねた結果、次善の策ではあるが、当初計画された立坑の予定地全域を調査し、そこから発見された石組溝・暗渠などの遺構を工事期間中解体して別途石材を保管し、工事終了後に復原するという案が打ち出された。第3次調査は、立坑の掘削によって破壊される範囲全体を調査するために、第1次調査区と重複する南北12m、東西9mの発掘区を設けて実施した。

今回の調査地周辺は、飛鳥寺と、飛鳥板蓋宮などの歴代の宮殿が営まれた重要な地域のほぼ中間にあたり、酒船石周辺における近年の調査成果と、『日本

書紀』の記述等を総合すると、7世紀中葉以降の大がかりな都づくりがこの辺りにも及んでいたと想定される。しかし、その遺構の実体については未調査部分が多いこともあってなお謎に包まれており、また適切な遺跡名も与えられていないのが現状である。小字名をつけるなどの案も考えられたが、遺構が小字戸ノ下の範囲にとどまらない大規模なものと推定されたため、この報告ではとりあえず飛鳥寺南方遺跡と仮称することとした。その範囲は、北を飛鳥寺の寺域南限、南を伝飛鳥板蓋宮などの宮殿遺構の北限（未確定）、東を酒船石が所在する丘陵、西を飛鳥川によって囲まれた平地部とし、そこに存在する7世紀代を中心とする遺構群の総称とする。したがって、今回検出した石組溝等は、この飛鳥寺南方遺跡の東を流れる基幹排水路として位置づけられる。

## 2. 検出した遺構

調査地は、飛鳥寺瓦窯が立地する丘陵の西斜面に接した村道と水田にまたがり、道路部分の盛り土を除去して旧道と旧水田の耕土・床土に達した。床土の下には上から青灰色粘質土層と黄灰褐色粘質土層の厚い堆積があったが、ほとんど遺物を含まない。この下には石組溝の埋没後に堆積した大量の砂層があった。この砂層を掘り下げて石組溝を、黄灰褐色粘質土層を取り除いて石敷などを検出し、その下層で石組暗渠や柱列を検出した。

今回検出した遺構は、7世紀中頃から平安時代初めにかけてのものであるが、調査面積が限定されたため、大きくA～C期の3時期に分けるにとどめ、詳細な時期区分は今後の周辺地域の調査の進展をまつことにしたい。

A期 石組暗渠SX10と、東側の丘陵岩盤を削った傾斜面SX13がある。

石組暗渠SX10は、丘陵西斜面を削る大規模な土木工事をともなって構築されており、幅・高さともに約0.8m、全長24m以上で丘陵沿いに緩く弧を描きながら西北方向に延びる。工事は、まず花崗岩岩盤を削って傾斜面SX13を設け、この傾斜面沿いの岩盤と地山の粘土層を掘り込んで幅約2m・深さ約0.8mの掘形を設ける。ついで、人頭大からひとかかえほどの玉石を3段ないしは

| Y 16,100

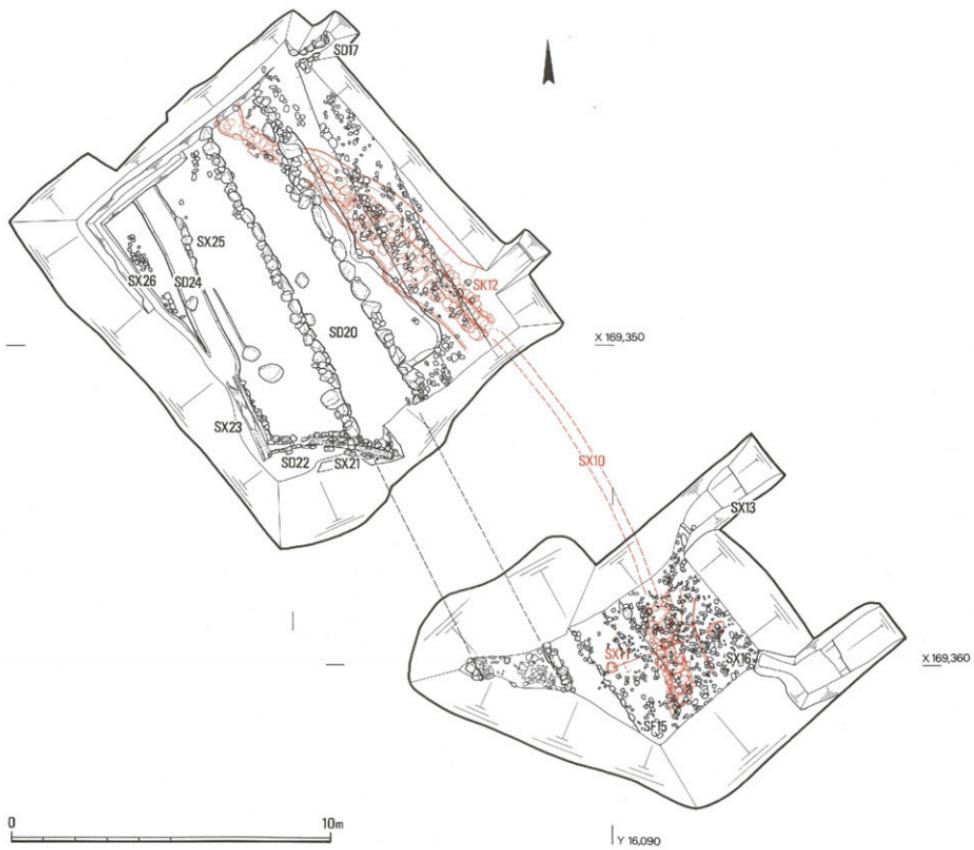


fig. 2 飛鳥寺南方遺跡第1・2・3次調査柵査測図 (1 : 125)

4段積んで両側石とし、蓋石を置いて大小の川原石を隙間に詰める。底には平らな玉石を1列から3列敷きつめるが、第3次調査区の中央部の約1.5mの間は、削り出した岩盤をそのまま底とし、その北約1mの間は拳大の玉石を敷いて底とする。内法の幅と高さはともに約0.5mで、内部には細かい粘土と砂が水平に堆積していた。各層ともに炭の碎片がかなり含まれ、また細長い木片が数片出土した以外に遺物はなかったが、最下層の粘土の微遺体分析を行った結果、両層ともベニバナの花粉が大量に含まれていることが判明した。（8頁の報告参照）。

なお、第2次調査区の石組暗渠は、柱列SX11の柱掘形によって蓋石が外されている以外、遺存状態は良い。しかし、第3次調査区では、その大部分が石組溝SD20の設置にともない破壊され、また、土坑SK12によっても壊されており、中央部のごく一部で蓋石が残っていたにすぎない。その他の部分では側石や底石だけが残り、その他の石はほとんど抜き取られていたが、その抜き取り穴から奈良時代の土器（平城宮IV段階）が出土した。暗渠掘形からは7世紀代の土器が、暗渠の直上を覆う整地土からは飛鳥III～IV段階の土器が少量出土しており、丘陵斜面の掘削と暗渠の設置は、7世紀中頃に遡る可能性がある。

B期 石組溝SD20、木樋SX21・23、石組溝SD22、木樋抜取り溝SD24、石列SX25、石敷SX26がある。

A期の石組暗渠は、花崗岩岩盤を掘り崩した黄褐色山土を用いた整地層で覆われている。その上には、丘陵上から流れ込んだ土砂が堆積した状況が土層観察の結果得られた。B期の石組溝SD20は、この堆積層上面から掘り込み、幅約4mの掘形を設けて側石を積む。深さは最大で0.8m、溝底の幅は広いところで約2m、狭い所で約1.7mである。両岸には長さ1.1～0.6mほどの大型の花崗岩を1段、または、ひとかえ大から人頭大の玉石を2段から3段積み護岸とする。溝内には大小の石が大量に堆積していたので、石積みはさらに1段ほど高かった可能性がある。また、第2次調査区では両岸から幅1mの間に砂岩切石や玉石を用いた底石が認められた。この溝の全長は21m以上に及び、ほぼまっすぐ伸びているが、このまま直進すれば丘陵にぶつかるので、第3次調査

区の少し北で西北方向に曲がると推定される。この石組溝からは、7世紀後半から8世紀初め頃の土器が大量に出土しており、溝として機能していた時期の中心がその頃にあることを示している。なお、この溝はC期にも存続する。

木樋 SX21・23は、玉石を並べて石組溝 SD20の水をせき止め、木樋を利用して水を北へ流す暗渠である。木樋 SX21は、幅15cm、厚さ11～13cm、長さ20.5cmの木樋Aと、幅14cm、厚さ9～10cm、長さ80cmの木樋Bの2本を連結して石組溝から木樋 SX23に水を取り入れる施設である。木樋Aの石組溝内に出る部分に蓋板はなく、両側の立ち上がり部分も低い。木樋の両側は砂岩の切り石を並べて補強するが、木樋 SX23と木樋Bの間約90cmの間には玉石を敷いて底石とし、両側に砂岩の切石を並べて幅10～20cm、深さ約30cmの石組溝 SD22とした部分がある。蓋石らしいものは木樋Bに接した玉石1個しか認められず、この部分が開渠となっていたか、暗渠となっていたのかは確認できなかった。

木樋 SX23は、幅30cm、厚さ22cm、長さ270cmの材に深さ11～12cm、底幅12～18cmの溝を穿ち、幅30cm、厚さ10cmの蓋板をのせたもので、石組溝と並行し北へ水を流す。石組溝 SD22との接続部分には深さ11cm、上幅37cm、下幅7.5cmの逆台形の切込みを設け水を取り入れるが、南側の小口を塞ぐ装置は認められなかった。北側の次の木樋との接続部分には、両側と底を浅く彫りくぼめた仕口があるが、別材を木樋の接続部分に当て、漏水を防ぐための工夫と見られる。また、木樋の接続部分には玉石をいくつか敷いて不等沈下を防いでいる。木樋はさらに北へ延びていたと推測されるが、抜取り溝 SD24によって抜き取られている。なお、この木樋内に堆積した粘土も微遺体分析を実施したが、寄生虫卵などは検出されなかった。

石列 SX25は、ひとかかえから人頭大の玉石を並べたもので、大部分が失われているが、石組溝 SD20の西約2mの位置に並行して設けられていたと思われる。石はやや傾斜をもって立てられているので、石組溝の西側に幅約2m、高さ0.3m程度の堤があったと推定される。その西側にある石敷 SX26は抜取り溝 SD24と小溝群によって壊されているが、かつては石列 SX25の西、つまり木樋 SX23の上は石敷で完全に覆わっていたと推定される。

柱列 SX11は、A期の石組暗渠 SX10の蓋石を一部壊してつくられた掘立柱の遺構である。柱間寸法は1.7m等間。調査区内で柱根2箇所と柱痕跡1箇所を検出したが、塀になるのか建物になるのか不明である。

**C期** 石組溝 SD20の東にある石敷舗道 SF15と、小規模な石組溝 SD17、第2次調査区で検出した石敷舗道の東にある石敷 SX16がある。これらは、石組溝 SD20の東側に丘陵からの土砂がかなり堆積してから設けられたものである。

石敷舗道 SF15は石組溝から約1m東にあり、幅約1.4mの間に玉石を敷きつめ、両側に見切りの玉石を並べたもの。石組溝 SD17は、丘陵からの雨水を舗道を横断して石組溝 SD20に流す施設である。

石敷 SX16は、玉石を粗く敷いたものであり、凹凸が激しい。この石敷上から9世紀後半から10世紀前半にかけての土師器が出土しており、この頃までこの石敷と石敷舗道・石組溝などが機能していたことが判明した。

### 3. 検出した遺物

土器・瓦・埴輪・土製品・木簡・砥石・砂岩の切石などがあるが、その大部分は石組溝 SD20から出土したものである。

木簡は14点（うち削り屑9点）が出土した。紀年を有するものはないが、文書木簡とみられるものが含まれている。

- □□前□白 (147) • (10) • 3 081型式
- [ ] □□□□□□□□□

瓦は、重弧文軒平瓦が2点と丸・平瓦が少量あり、重弧文軒平瓦のうち1点は川原寺創建時のもので、飛鳥寺にも使われている。丸・平瓦の中にも飛鳥寺所用と思われるものがある。

砂岩の切石は、伝飛鳥板蓋宮や、最近では酒船石北方遺跡の石垣遺構に多数使われていることが判明したものと同質同形で、なかには斜面を削り出したものもある。石組溝 SD20の砂層から破碎したものが多数出土したほか、第2次調査区で検出した石組溝 SD20の底石には26cm四方の切石が使われていた。

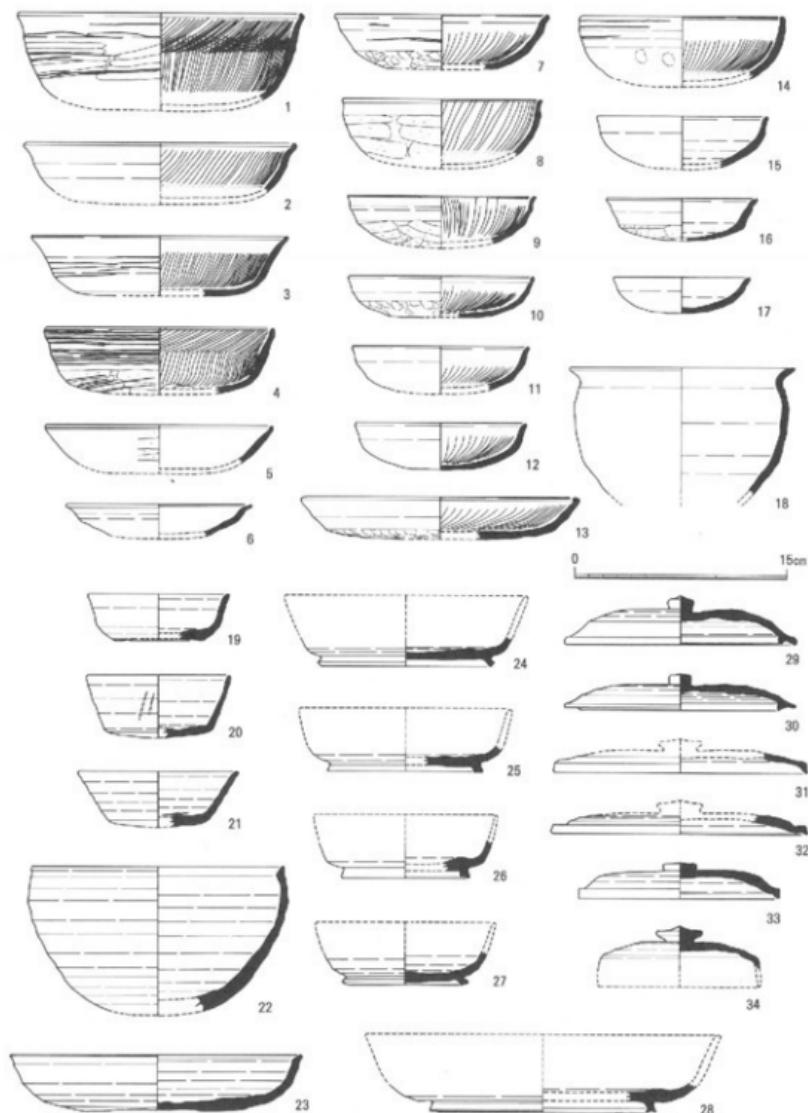
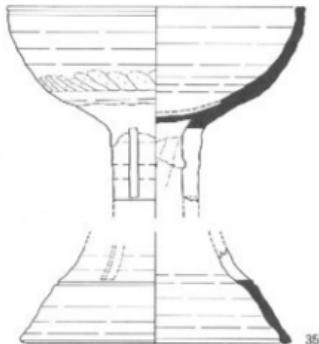


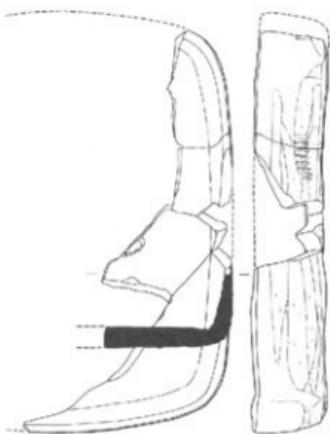
fig. 3 出土土器実測図 (6) 石敷S X26上面、(33) 土坑S K12、その他：石組溝S D20 (1 : 4)

### 土器・土製品 (fig. 3・4)

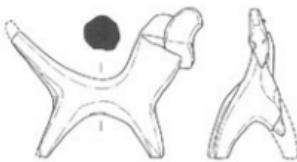
多量の土師器や須恵器のほか、少量の綠釉陶器・黒色土器、土馬・埴輪・薩羽口などが出土した。ここでは出土した土器の大半を占める石組溝 SD20出土土器を中心に報告する。SD20出土土器には、7世紀から9世紀中ごろまでの土器を含み、そのうち、7世紀後半から8世紀初めのものが主体を占める。土師器には、杯A（1～5）、杯C（7～12）、杯D（14）、杯G（15）、杯H（16）、皿A（13）、皿C（17）、甌A（18）などがある。須恵器は杯A（21）、杯B身・蓋（24～32）、杯G（19・20）、皿A（23）、鉢A（22）、壺A蓋（34）などがある。図示した土師器杯A（5）の年代は9世紀中頃で、それ以外は7世紀から8世紀にかけての時期のものである。この他に、8世紀の製塩土器が比較的多く出土している。SD20以外で出土した土器のうち、土師器杯A（6）は石敷SX26上面、須恵器杯B蓋（33）は土坑SK12から出土している。器台（35）は、鉢形の杯部と脚部からなり、脚部に長方形の透しを3方向から穿ち、3段透しと考えられる。（36）は折敷状の隅丸長方形を呈す須恵器の皿で、内面は丁寧にナデ調整されている。土馬（37）は3点出土した中の1点である。土師質で左前後脚と尾の一部を欠く。8世紀中頃。（35）・（36）は7世紀の包含層、（37）はSD20から出土。



35



36



37



fig. 4 出土土器・土製品実測図  
（35・36）包含層、（37）石組溝  
SD20 (1 : 4)

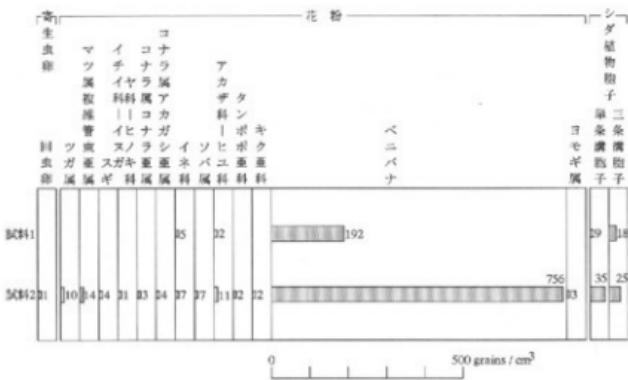


fig. 5 花粉・寄生虫卵組成図

#### 4. 石組暗渠 SX10内堆積土の微遺体分析

第2次調査区で検出した石組暗渠内下層の淡灰褐色粘土の南側部分（試料1）と、北側部分（試料2）の2試料について良好な分析結果が得られたので報告する。方法は金原（1992「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構』奈良国立文化財研究所）にしたがい、花粉と寄生虫卵を対象とした。

寄生虫卵は試料2から回虫卵が1個検出されたが、通常の汚染の範囲であり、遺構の性格を限定するものではない。花粉遺体はベニバナ（Carthamus, tinctorius, Linn.）の花粉が特徴的に多く、堆積土1cm<sup>3</sup>中に試料1で192個、試料2で756個という出現量を示す。他は試料2に食用となるソバ属の花粉があるのを除けば、通常出現する風媒花植物の花粉が少量含まれるのみである。

ベニバナ花粉は、花粉量が少なく分析に反映されにくい虫媒花であることを考慮すると、近くの畑などで栽培されていたものからの供給とみなすには相対的に出現量が多すぎ、ベニバナの花序を多量に使用する染織の廃液など特殊な供給源に求めるのが妥当と考えられる。他にヒノキの木材組織片が多く含まれていた。（天理大学附属天理参考館 金原正明、環境文化研究所 金原正子）

## 5.まとめ

今回の調査では、7世紀末から平安時代初めまで存続した大規模な石組溝や、7世紀中頃に遡る可能性が高い石組暗渠などを検出した。全体の規模や用途は明らかでないが、石組溝は雨水などをまとめて飛鳥川に排水する施設、石組暗渠や木樋は、下水あるいは上水を流す施設と考えられる。

飛鳥寺の西から南にかけては、木樋・土管・石組溝・石組暗渠など、水の利用にかかる多様な形態をもつ遺構が集中する特異な地域と考えられてきた。今回検出した石組溝や石組暗渠はそのなかでも最大の規模があり、重要な役割を果たしたものと考えられる。とくに、B期の石組溝 SD20は全長21m以上に及び、東の丘陵地帯から流れ出る雨水等を集め、北へ排水するための基幹排水路として機能していたことが確認された。また、まわりに石敷や石列をもつ堤、石敷舗道などが順次作られ、この地域の遺構群の東限を画す施設として長期間機能していたことも判明した。この石組溝の方位は、国土方眼方位に対して北で西に30度近く振れており、ほぼ真北方位をとる飛鳥寺や伝飛鳥板蓋宮跡に重層する宮殿遺構とは大きく異なる。このまま北進すれば10m足らずで丘陵にぶつかるので、おそらく大きく西に曲がり、飛鳥寺の寺域を避けてその南を通り、最終的には飛鳥川に排水するものと推定される。

今回の調査区から西北へ約70m離れた地点では、石垣や底石をともなう池や石組溝が検出されている（飛鳥京跡第28次調査）。周辺の地形やその構造から推定すると、今回発見した石組溝と一連の遺構かと考えられる。また、石組暗渠や石組溝は、自然地形にしたがって築かれており、一部で想定されてきたような飛鳥地域の方格地割の存在が、少なくともこの地域には認められないことが確認されたことも成果のひとつに数えられよう。

さらに、A期の石組暗渠 SD10内の堆積土中からベニバナの花粉が大量に検出され、上流にベニバナから抽出した染料を利用して染織に関する工房の存在が考えられるようになった成果も大きい。周辺地域における、これから調査の進展が大いに期待される。

## 6. 石組溝および暗渠位置復原工事

**原位置復原の意義** この復原工事の対象となった飛鳥寺南方遺跡の石組溝および石組暗渠は遺存状況がよく、飛鳥の石造構造物構築手法や水利施設の歴史を知る上で重要な遺構であった。しかし、下水道計画の遂行上、立坑の位置の変更が困難であったため、関係機関と協議の結果、石組溝および暗渠の石材をいったん解体して保管し、工事の完了後、原位置に復原する方針がとられた。

一般に土木建設工事の対象地が遺跡と重なり、土木工事を優先する場合の遺跡の取り扱いとしては、発掘調査を実施して記録をとったうえで遺跡を除去してしまう記録保存が大勢を占める。まれに、遺構が移築に耐える石造等のもので、かつ諸条件が整った場合に、記録を十分にとったうえ遺構をいったん解体・保存し、別の場所に復原して展示に供する移築復原が実施されることがある。佐賀県の久保泉丸山古墳や京都市の旧伏見城の石垣などがその実例である。

今回の飛鳥寺南方遺跡の場合、重要な遺跡であるとともに石造の構造物であったため、移築復原する案も検討されたが、あえて復原後遺構をふたたび地中に埋め戻す原位置復原という方法を採用した。それは、以下の理由による。まず、たとえ展示など現在の機能に対応し得ない場合でも、遺構を原位置に戻すということが遺構の保存方法の一つの選択肢であると考えたためである。第二に、石組溝および暗渠はその前後に連続する遺構の一部であり、とくに石組溝は現在でも地下水の流路となって溝内の遺物、とくに木質遺物の保存に寄与している可能性があるためである。

**記録作成（1993年3月）** 一般に石造構造物の原位置復原を実施するにあたっては、その絶対位置を正確に記録するとともに、隣接する石の接合状況など復原のために必要な情報を確保しておく必要がある。そのため、解体前に以下の手順で記録作成を行った。

- 1) 石組溝および暗渠の正確な平面図および立面図の作成。
- 2) 石材一つ一つに水性ペンキで番号を書き込み、平面図および立面図にもその番号を記入して対照できるようにする。

3) 隣接する石の接合状況を示すため接合部に墨打ちを行う。

4) 以上の作業が終わった遺構細部を詳細に写真撮影する。

**解体・保管**（1993年3月～1995年2月） 上記の記録作成が終了した部分から解体を行った。石組暗渠の下部の一部など解体前に記録作成ができなかった箇所については、適宜、追加の記録作成を行った。解体は上部から順に手作業で慎重に行つたが、石材の大半が花崗岩であり一部に風化が激しく取り上げ不能のものもあった。解体した石材は水洗いで土を落とした後、ビニールシートをかぶせて保管した。

**復原工事**（1995年2～3月） 復原は解体前に作成した実測図・写真にもとづき実施した。なお、風化のため取り上げられなかった石の欠損部分には、できるだけ同程度の大きさの石を補った。補充した石には墨で1995と西暦年号を記入し、本来の石と区別できるようにした。工事の手順は以下のとおりである。

1) 立坑工事終了後、遺構面の標高付近までマサ土で埋め戻し・締め固めを行い、復原工事の地盤を造成。

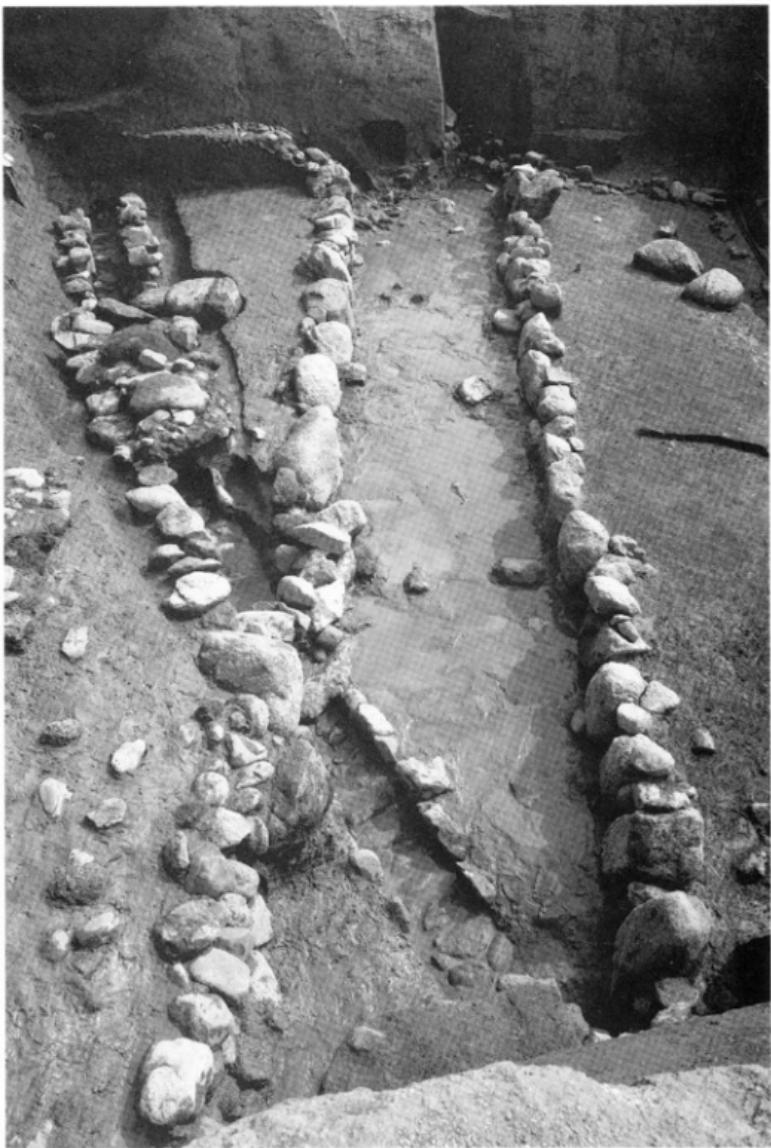
2) 石組溝の側石と石組暗渠の側石・底石については、1.5～2m前後に1個の間隔で基準石を設定し、実測図の平面座標および標高値にもとづいて正確に位置を復原し据え付けた。基準石は、大型あるいは形状に特徴があるなど正確に位置を決定しやすいものを選んだ。なお、石の据え付けにあたっては、クラッシャーラン（C40）を底部に充填した。

3) 基準石の間に入る石を実測図と写真に基づいて据え付けた。その際、解体前に打った墨により接合部を解体前の状況にできるだけ近づけるとともに、底部や目地はC40で充填した。

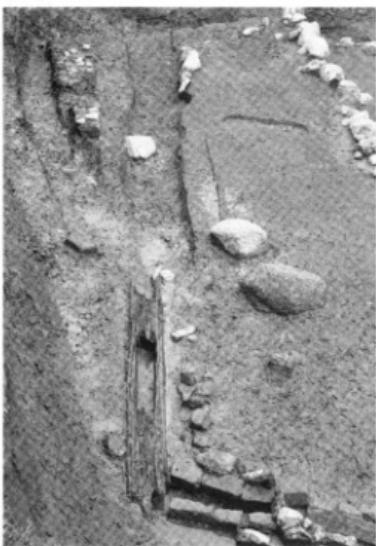
4) 石組暗渠の蓋石部分については、暗渠内をマサ土で充填し、その上に位置を復原し据え付けた。

5) 石組水路は伏流水の流路となっている可能性があるため、水路の底面・側石の背面には、C40にペントナイトを混合して不透水層を築成。また、側石の目地は、ペントナイトとマサ土を混合した目地を入れた。

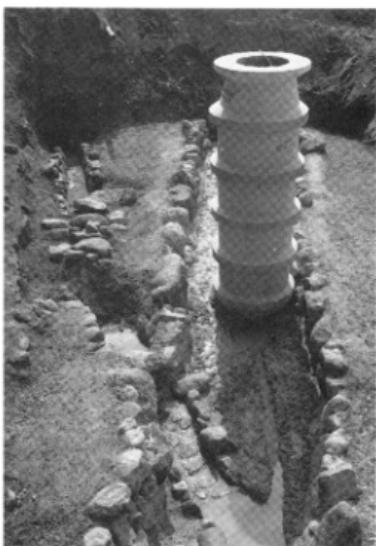
6) 遺構復原完了後、マサ土で遺構全体を埋め戻した。



1. 第3次調査区 SX10・SD20（北から）



1. 第3次調査区 SX21・SD22・SX23・  
SD24(南から)



2. SX10・SD20復原工事竣工(北から)



3. 第2次調査区 SX10・SX11(北から)

## 飛鳥寺南方遺跡発掘調査報告

---

1995年3月25日 印刷

1995年3月31日 発行

編 集 奈良国立文化財研究所  
奈良市二条町2丁目9番1号

発 行 奈良県教育委員会  
奈良市登大路町

印 刷 明新印刷株式会社  
奈良市南京終町3丁目464番地

---

